



Data

監督・脚本・製作：サラ・ポーリー
製作：スーザン・キャヴァン
出演：ミシェル・ウィリアムズ/セ
ス・ローゲン/ルーク・カー
ビー/サラ・シルヴァーマン

👁️👁️ みどころ

注目株の女流監督サラ・ポーリーが、『ブロークバック・マウンテン』（05年）、『ブルーバレンタイン』（10年）のミシェル・ウィリアムズを起用し、2人の男の間で揺れ動く人妻の内心に肉迫！『マリリン 7日間の恋』（11年）では『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』（11年）のメリル・ストリープに敗退したものの、コケティッシュで中性的な魅力を発揮した本作で、ミシェル・ウィリアムズはひょっとして再び主演女優賞ノミネート？

テーマは「どっちつかず」状態からの決断！渡辺淳一の「不倫モノ」とは異質の、女流監督目線による女心の揺れと決断に注目！しかし、それにしても・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■5年ぶりの本作も、前作に負けず劣らず・・・■□■

カナダ出身で1979年生まれ的女流監督サラ・ポーリーの長編監督デビュー作『アウエイ・フロム・ハー 君を想う』（06年）を観た私は、その評論でデンマークの女流監督スサンネ・ピアと共に「世界にはあちこちにすごい才能があるものだ」と書いた（『シネマルーム20』82頁参照）。他方、去る5月10日に観た在日朝鮮人の梁英姫（ヤン・ヨンヒ）監督の『かぞくのくに』（12年）はすばらしかったが、注目を集めている日本人の女流監督、蜷川実花が沢尻エリカを主演に起用した『ヘルタースケルター』（12年）は、話題性こそいっぱいだったが、内容は空疎でいささか失望した。4歳で美少女子役としてデビューしたサラ・ポーリーは、その後演技派女優に成長するとともに脚本、監督業に進出した。そして『アウエイ・フロム・ハー 君を想う』では、私が高校生の時に観て感動した名作『ドクトル・ジバゴ』（65年）の名女優ジュリー・クリスティを起用して絶

賛をあびた。

そんな彼女が長年自問自答してきたという「男女間に永遠の愛は存在しうるのか？」をテーマとした、かなり悩ましくかつ際どい映画が本作。大まかにジャンル分けすれば、本作はやさしい夫に恵まれ幸せな家庭生活を送りながら心の奥底にどこか満たされないものがあり、それがあの日出会った青年との間で恋の炎となって燃えあがり・・・という不倫モノだが、サラ・ポーリー監督の冷静沈着な目(?)を通してその主婦の視点を分析すれば、本作のような映画になるらしい。日本では渡辺淳一が「不倫モノ」の最高権威(?)だが、30歳を過ぎたばかりのサラ・ポーリーの目を通せば、同じ女性目線による分析だけにその不倫ぶり(?)はもっと生々しく・・・?とにかく、サラ・ポーリー監督の5年ぶりの新作は、前作に負けず劣らずの傑作に・・・。

■□■マリリン・モンローから大変身! ■□■

ミシェル・ウィリアムズといえばマリリン・モンローを演じた『マリリン 7日間の恋』(11年)、『シネマルーム28』33頁参照)が有名だが、同じアカデミー賞主演女優賞にノミネートされても、マーガレット・サッチャーを演じた『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』(11年)、『シネマルーム28』29頁参照)のメル・ストリープの出来があまりにもすばらし過ぎただけに、その劣勢は明らかだった。ミシェル・ウィリアムズについては『ブロークバック・マウンテン』(05年)、『シネマルーム10』262頁)や『ブルーバレンタイン』(10年)、『シネマルーム26』31頁参照)での演技が強く印象に残っており、もともとマリリン・モンロー役にピッタリの女優ではないと思っていたが、『マリリン 7日間の恋』では予想以上にマリリン・モンロー役を好演していた。

そんなミシェル・ウィリアムズが本来の持ち味であるコケティッシュで中性的な味を存分に発揮しつつ、同世代の女性サラ・ポーリー監督の演出によって、優しい夫ルー(セス・ローゲン)への愛と、一目惚れした若者ダニエル(ルーク・カービー)への内に秘めた性的欲望との葛藤に揺れ動く女心を見事に表現!マリリン・モンロー役ではメル・ストリープに予想どおり敗退したが、もし本作で再びアカデミー賞主演女優賞にノミネートされれば、初の主演女優賞獲得の可能性もあるのでは・・・。

■□■この偶然はやや不自然だが・・・ ■□■

約2時間で構成される映画では、いかに導入部で興味を持たせる設定にするかが1つのポイント。しかし本作冒頭では、カナダ生まれのサラ・ポーリー監督らしく、カナダ国定史跡というノバスコシアにあるルイスバーク要塞での取材風景が描かれる。フリーランスのライターとして働く28歳のマーゴ(ミシェル・ウィリアムズ)が取材に訪れたこの地のイベントで、見物客の青年ダニエルとはじめて知り合うという設定だ。

面白いのは、帰りも2人は同じ飛行機だし、座席も隣り合わせという偶然。さらに空港からタクシーをシェアした2人が帰る方向も全く同じで、到着してみれば自宅が互いにす

ぐ向かい側だったという偶然。現実にはこんな偶然はありえないから、これは映画ならではの自由な設定だが、近時の邦画のようにクドクドとしたセリフで状況設定を説明しないところがいい。たとえば、読書するフリをしながら隣のダニエルの寝顔に見とれているマーゴの姿や、何やかやの会話でマーゴの本心にズバリ切り込んでくるダニエルの姿を見れば、自然に2人が意識し合っていることがハッキリ見えてくる。そして、タクシーから降りる時、聞かれてもいないのにマーゴが「夫がいるの」とダニエルに告げるシーンを観ていると、たちまちこれだけで不倫の予感が・・・。

そんな冒頭10～15分の偶然はやや不自然だが、映画づくりではこれはOK! さあ、これにて状況設定は十分観客の頭に入ったはず。しかして、次に見えてくるマーゴとルーの夫婦生活の「実」と「虚」とは？



(c) 2011 Joe's Daughter Inc. All Rights Reserved

■□■一見仲が良さそうだが？これだけスレ違っては？■□■

本作のラストには、R-18指定にされても仕方ないのではないかと思うような過激なセックスシーンが登場するし、ウォーターピクス教室終了後のシャワーシーン等ではかなり生々しいヌード姿も登場する。それにもかかわらずあまりいやらしい感じがしないのは、これらのシーンをミシェル・ウィリアムズがサラリと演じているためだ。それはともかく、今マーゴが必要以上に夫のルーにベタベタしているのは、ダニエルに惹かれている自分を懸命に抑制するためだということは男の私が見てもよくわかる。ところが肝心のルーは料理本出版に向けて鶏肉料理の研究・開発に夢中になっているため、そんなマーゴの気持が

全く理解できないらしい。野田総理がやっ和小沢一郎元代表との決別を決断したように、こんな時はマーゴが「夫婦は所詮、他人」と割り切れればいいのだが、それができないマーゴはいつもスレ違うルーとの夫婦関係にイライラ……。意を決したようにマーゴが「寂しい」と言いながらルーを求めたのに対するルーの「犬でも飼う？」というトンチンカンな返事をみれば、2人のスレ違いぶりは明らかだ。

とりわけそれが顕著になるのは、結婚5周年の記念日にダニエルが本業とするリキシヤ（日本の人力車のようなもの）に乗せてもらって映画を観た後の夫婦の姿。せっかく記念日のディナーを2人で食べながら何の会話も無い風景に、ルーは「会話をするために話すのは嫌だ」と言って意に介さないようだが、これは誰が見ても異様。そんなスレ違いの中で逆にマーゴとダニエルの接点は次第に広がり、今日はプールで、今日は湖で、と逢瀬を重ねていた(?)から、2人が越えてはならない一線を越えるのは時間の問題……。女から男に投げかける、「あなたの愛し方を教えて……」というセリフはかなり過激だし、それについてダニエルがマーゴに語る詳細な説明はちょっとしたポルノ小説も負けそうなほどエロティックだ。もっともそこで、マーゴは、「35年間夫に忠実なら、1度のキスは許されると思う」と述べて30年後のルイスバーグ要塞でのデートとキスを約束したが、これは明らかに自分に自分でプレーキをかけたものだ。

このようにルーとマーゴは一見仲が良さそうだが、その絆は今や風前の灯火。ここで最大の問題は、夫のルーがそんな危機に全く気づいていないこと。最近では熟年離婚が多いが、それらの相談を聞いているとまさに本作と同じような夫婦間のスレ違いの実態が明らかになる。なるほど。ここまでスレ違えば、ルーとマーゴの離婚は時間の問題……？

■□■この決断は、2人ともお見事！■□■

本作は「昼ドラ」風に言うと人妻のよろめきドラマだから、マーゴをめぐる2人の男性がどちらも魅力的であることが絶対条件。しかして、サラ・ポーリー監督は、一方ではルーの良き夫ぶりについて、他方では一見ぶっきらぼうだがハンサムなダニエルの男性的魅力について、いかにも女性的な繊細さでかつマーゴの目を通して描きあげていく。ルーの夫としての善良さは、アルコール依存症から回復中の姉ジェラルディン（サラ・シルヴァーマン）をはじめとする家族たちをホームパーティーに招いている姿を見ればよくわかる。これは、自分が開発したレシピを味わってもらうことが主たる目的だが、赤字覚悟のこのイベント(?)は家族の交流にはもってこいだ。

映画中盤のキーワードはマーゴの心の揺れ(=どっちつかず)だが、いつまでもどっちつかず状態が通用しないことは世の常。本作でうまく描いているなど感心するのは、マーゴの気持を知った時のルーの動揺ぶりと決断。そもそもルーにはマーゴが何を不満に思っているのかそれ自体が理解できていなかったわけだから、ある日突然目の前に現れたハンサムな青年ダニエルが妻の心を奪っていると知った時、その心が大きいに乱れたのは当然。しかして、そこでルーが示した決断とは？また、ここでマーゴが下した決断とは？結婚5周年を迎えたばかりの2人が下したこの決断はお見事！という他ない。

■□■女同士の激論(?)から見えてくるものは?■□■

女は1つ決断すると、その後の行動は早い。そして、ここからは前述のように女流監督とは思えないような過激シーンが続出する。しかし、今はこんなに幸せそうな2人でも今後ホントに幸せな生活を築いていくことができるかどうかは不明。そもそも、リキシャなんかを本業にしているダニエルの収入は大丈夫?また、向かいの家から出て行った後、ダニエルはどこにどんな本宅を構えているの?人妻が若くハンサムな男の魅力に惹かれて駆け落ちしたものの、しばらくすると男に飽きられて捨てられて……。そんな物語はあちこちに散見される場所だ。そこで問題は本作の結末のつけ方だが、ここでもサラ・ポーリー監督は意外な女同士の「激論」を登場させるから、そこに注目!

今、幸せそうなセックスまみれの生活(?)に浸っているマーゴに対して、ジェラルディンの娘のトニーが会いたがっているという連絡が入った。そこでマーゴがルーの家へ駆けつけてみると、そこにはパトカーに乗った警察官が来て、事情聴取の真っ最中。そして全員が注視する中、暴走するジェラルディン運転の車が電柱に衝突し、車の中からは大量に飲酒したジェラルディンが出てきたからマーゴもビックリ。あれれ、ジェラルディンは禁酒10カ月を祝うパーティーを開いたばかりではなかったの……?そこで展開されるのが、警察官に連行されようとするジェラルディンとマーゴの激論、というよりジェラルディンの一方的なマーゴに対する鬱憤のぶちまけ。「弟の苦しみを横目に、あんたは何という勝手な行動を」というのがジェラルディンの怒りの趣旨だ。さすがに、そのとぼっちりで私まで……とは言わなかったが、ホントはそれもあるようだ。ルーとマーゴの2人だけの話し合いでは、わがままも含めた感情のぶつけ合いを互いに避けていたが、義理の姉という立場で弟の嫁の勝手な行動を見れば、その怒りはごもっとも。さあ、そんな女同士の激論(?)から見えてくるものとは? 2012(平成24)年7月3日記

渡辺淳一『愛ふたたび』が連載中!

1) 私は「テイク・ディス・ワルツは渡辺淳一の『不倫モノ』とは異質」と書いたが、どちらが好きかは人それぞれ。医師でもある彼の小説は、①伝記モノ②医療モノ③不倫モノに大別されるが、私が好きなのは不倫モノ。特に1995年9月から日経新聞に連載された『失楽園』は毎朝欠かさず読んでいたものだ。不倫モノは映画化されたものも多い。『化身』でデビューした黒木瞳の若き日のヌードは絶品だったから、『失楽園』

のそれと比較するのも一興だ。
2) 1933年生まれの彼の執筆意欲は旺盛で、09年には『欲情の作法』と『告白の恋愛論』を出版した。そんな彼が今年7月からは、大阪日日新聞に『愛ふたたび』を連載中だ。現在の場面は、性的不老に近い主人公が美人弁護士を部屋に連れ込んだところ。さて今後の展開は?これらはきっとすべて彼の体験談だろうから、何ともしごいものだ。
2012(平成24)年11月1日記